(別紙 2)

審査結果の要旨

氏名　森　寿美

本論文は、哲学的な認識論ではなく、一般の人々がもっている素朴な認識論の一つと考えられる素朴弁証論（naïve dialecticism）に関して、著者が行った日米間の比較文化研究に基づくものである。著者は、素朴弁証論のうち、とくに、ものごとは変動するものであるという変化についての考え方に日米の文化差があり、そのため、未来予測が異なるだろうという斬新な予測を立て、それを検証した。

著者は三つの実証研究を行っている。研究１では、素朴弁証論的自己尺度を用い、日米間の素朴弁証論の存在の有無を検討し、未来が予測可能であるとする信念が日米間で相違するかどうか、さらに、この未来予測可能性信念と素朴弁証論的自己尺度に相関があるかどうかを検討した。研究２では、被験者間実験を行い、被験者に未来予測の刺激として、ランダムな快（または不快）な事象が起こったことをシナリオとして読ませ、それとは関連のない他の事象が起こりそうなときに、その事象が快であるか、不快であるかを予測させた。さらに、その事象が実際に生起する頻度を推定させた。研究３では、被験者間、被験者内実験を行い、被験者にランダムな３つの快（または不快）な事象がある一定期間（１日、１週間、１ヶ月）に続けて発生した事をシナリオとして読ませた。それから、次に生起する事象が、一定時間枠内（今夜、今週、今月）では快か、不快か、また一定時間枠後（明日、来週、来月）では、快か、不快かを予測させ、その事象が実際に生起する頻度を推定させた。さらに、研究２、研究３では、未来予測の文化差が実際に未来予測可能性信念によって媒介されているか否かを、媒介分析によって検討している。

これらの研究の結果、日本人はアメリカ人よりも、素朴弁証法的自己の記述に同意し、未来は予測可能ではないと信じる傾向が強いことがわかった。さらに、アメリカ人は日本人に比べ、快事象の経験後はより快の、不快事象の経験後はより不快の経験をすると予測する傾向が強かった。一方、日本人は、快経験の直後には、快経験を「あまり経験しないだろう」、と回答していた。さらに、未来予測可能性信念は事象の直後の予測の文化差を媒介していることもわかった。そして、一定時間枠後（明日、来週、来月）では、アメリカ人は、どの場合でも快経験をするであろうと予測したが、日本人は快経験の後は不快、不快経験の後は快経験をすると予測した。これらの結果から、事象は絶えず変化するという日本人の信念は、素朴弁証論から派生し、未来予測の文化差は、その素朴弁証論から派生した未来の予測可能性に対する信念の相違であると考えられる。

これらの文化差はこの研究によって初めて明らかにされたものであり、人々の素朴な認識に関する比較文化的研究に大きな貢献をするものである。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。